

◆ 警察上層部で密かに継がれる淫靡な「慣例」について ◆

◇ 調教の経過報告 ◇

「ツぐ、う……ッ、も、イヤだ……っ！ やめ、ろ……ッ！」

広いジュニアスイートの床の上、全裸に剥かれてうつ伏せて、お尻だけを高く上げた姿で後孔を激しく犯されている。

高梨の臀部を驚掴みにして、シャツは着たまますラックスと下着だけ脱いだ姿で腰を振るのは、警察庁の次長。

同じような姿で、床にベッタリと頬をくつつけた高梨の頭を革靴で踏みつけるのは、副総監。それを恍惚とした表情で見つめるのは、一人しっかりと服を着たままの刑事局の局長だ。

彼らに勝られるようになったのは、一年ほど前のこと。高梨が関わり始めたプロジェクトについて個人的に話をしたい、と呼び出されて、次長と副総監に丸一日かけて強姦されたことはいまだに忘れ難い記憶だ。主導している上司と、プロジェクトそのものを盾にされてしまえば、如何に高梨といえども抵抗はできなかった。

それ以降、二か月に一回くらいのペースで呼び出されるようになった。高梨の直属の上司に「上長命令だ」と言われれば無視もできない。嫌々ながら出向き、そのたびに気を失うまで勝られるようになり。心までは飲まれないうようにと奮い立たせていても、次第に諦めが勝るようになっていつてしまった。

それでも休みなく勝られ続けるのは耐えられなくて、必死に這いずって逃げようとしてしまうのを止められない。

「はあ、新しいペットはいつまで経っても従順にならん。ケツまんこはだいたいぶ熟れてきて上手にしゃぶれるようになってきたというのに、上の口はいつまでも生意気なままだ。今までのペットたちは、一年も経てば喜んで自分から腰を振っていたんだがなア……」

「まったく、困ったもんですよねえ次長。ま、生意気な駄犬を可愛がるのはそれはそれで興

奮するし、悪くはありませんがね」

「そうさなあ、手のかかる駄犬ほど可愛がり甲斐があるのは確かだな。生意気な鼻っ柱をへし折って這いつくばらせるのはたまらん。じゃじゃ馬な方が馴れる楽しみが増える、か」腰の動きは止めないまま、次長と副総監が愚痴を零す。その一言一句がまた屈辱を呼び起こして、ガリッと絨毯を引っ掻いた。

「まーた反抗的な目をしおつてからに。じゃじゃ馬も悪かあないが、尻尾をブンブンさせて目シムハートにして縋りつくペットの方が、余程可愛がり甲斐がある」

「ッあああッ！」

不機嫌そうに、どすッ！ と剛直を叩きつけられて喘ぐ。

そんな一連のやり取りをニヤニヤしながら眺めていた局長が、愉しげに声を上げた。

「はーい！ 次長と副総監に提案でーす！」

「おお？ なんだね新入りくん。何か良い方法でも思いついたか？」

今日は何故か、突発参加らしい局長が混ざっていた。

声をかけられたのか、あるいは自分から声をかけたのか。そこはわからないけれど、参加するということは、こういったことに忌避感がないということかもしれない。

「人の手だけで調教するってなかなか大変でしょ？ でも矜持をへし折らないとイイ子になってくれない……なら、いつまでも射精できない環境で快楽責めにして、寸止めさせ続けるんですよ。玩具を使ってね！」

愉しげな声で告げられた内容に、ひゅ、と喉が鳴る。

懸念が現実のものであったと、答え合わせができてしまった。

「お？ ケツまんこがぎゅうぎゅう締めり始めたぞ。なんだ？ 局長の提案が嬉しいのか」

「ッ、ちが、ちがう……ッ！ いやだ、絶対にいやだ……ッ！」

「……なるほどなあ。わかったわかった」

殊更優しげな声でそう言われて、イヤな予感に身震いする。

「あ、ああああッ！」

ばちゅばちゅばちゅッ、といきなり激しくなったピストンに身体を揺さぶられ、襲ってくる絶頂感に抗えずに腰を痙攣させて射精する。それと同時に次長も達して、胎内を熱い精液が満たしていく。

おぞましさに顔を伏せて打ち震えていたら、剛直がずるんと抜けていった。ほおっと息をついたのも束の間。

「……局長。もしかしてなんだが、すでに玩具を持ってきたか？」

「うふっ♡ ありますよ、たあつくさん！ 拘束具もあるんで、鞆持ってきますねー！」
次長と局長の会話に、身体が硬直する。お尻を高く上げた格好のまま、動きを止めてしまった高梨を睥睨しているらしい次長が。

「おまえがいつまでも抵抗するつもりがあるということは、よくわかった。であれば、こちらも全力で躰をするまで。……さて、体力も精神力も申し分ないエリート様が、どこまで耐えられるか……見物だな？」

ククク、と嘲笑う声に身体が竦む。

「はーい、持ってきましたよー！ まずはお、せっかく次長が出してくれた精液を零さないように、蓋をしちゃいましょうねっ♡」

「……!? やめッ、」

後ろから聞こえてきた声に、ハッとして振り返る。ニタリと愉しげに嗤う局長が、手に持った細長いパイプを後孔に宛がう気配がして、慌てて逃げようとしたのに。

「おッ!? ああ——…っ!!」

ぢゅぷんッ！ とひと息に突っ込まれて、身体を仰け反らせた。

「はーい、スイッチオン！」

ブイイーン、とモーターが回って。

「ひ、いいッ！」

副総監と次長に嬲られた直後の、敏感になったままの胎内をバイブが激しく震えて叩く。震えたままぶちゅぶちゅと抜き挿しされ、前立腺をリズムカルに擦られて、いったばかりの陰茎がまた膨らんでいく。

「イク、またイクうう…ッ！」

いよいよ絶頂する、という寸前でバイブのスイングが止まった。

「あッ!? あぁぁ……っ？」

解放できないままの熱を抱えた腰が、情けなくヘコヘコと揺れる。

「うふふ、腰ヘッコヘコしててなっさけな〜い！ イけなかったねえ、ざあんねん」

「ぐ……ッ」

ちっとも残念じゃなさそうな声色で、背後の局長が嘲笑う。悔しさで唇を噛み締め、どうにか腰の動きを止める。

「……なあるほど。これは確かに可愛くないですね〜。反応わる。俺が別で飼ってるペッ

トのがよっぽど可愛いや……ま、逆にやりがいがあるってもんだけどね！」

高梨の頭側に移動した局長が、ひとつに結んだ高梨の髪を鷲掴みにして引っ張り、無理やり顔を上げさせられる。

「覚悟しとけよ、高梨。そのうちイヤでも泣いて媚びることになる。……謝るなら今のうちだよ？」

鋭い眼光で高梨を睨みながら、こてんと首を傾げる局長に、嫌悪感が湧き起こる。

「……は、誰が」

わざとらしく口角を上げてやったら、局長の顔が怒りに歪んだ。髪を掴んだ手はそのままだに、高梨の身体を引き起こす勢いで髪を引っ張られて、痛みで顔が歪む。

「ッ、ぐ……ッ！」

「舐めてんじゃねえぞ雑魚メス。後悔させてやるよ」

立ち上がりかけた身体を蹴り飛ばされ、仰向けに転がる。その衝撃で後孔に入れられていたパイプが抜けて、ゴトリと床に落ちた。

そこを次長と副総監に捕まえられ、腕を掴まれ引きずられて一人掛けのソファに座らされる。けれどそのソファには、何故か防水シートのようなものが敷かれていた。イヤな予感が止まらない。

抵抗する間もなく、首と足首に枷を着けられて、首枷から伸びる金属チェーンを足枷に繋がれた。一気に可動域を減らされて、もう逃げられないことを悟ってどうしても心臓が早鐘を打つ。でもそれだけでは終わらなかった。

ふともにも枷を巻きつけられ、胴体に着けられたハーネスのようなものに金属の留め具で繋がられ。

「……ッ」

M字開脚を強いられて、ぐつと唇を噛んだ。それに気づいたらしい局長が、ニヤリとイヤな笑みを浮かべるのが見えて、眉をしかめて顔を逸らす。そして最後に、両手首に着けた枷をハーネスの背面にガチャリと留め具で繋げたらしい音が聞こえて、身動きが取れなくなった。

さらには麻縄まで持ち出して、ソファの背もたれに上半身を固定されてしまう。歯を食いしばり、戦く心を押し隠して、愉しげに見下ろす三人を睨んだ。

「あはっ♡ いいね、最ッ高に無様で似合ってるよお。うふふ、その強気な目もいつまで保つかなく？ さあて、仕っ上げに。このローションはねえ、媚薬入りだよ！ あー大丈

夫大丈夫。さすがにね、違法なヤツは立場的に不味いからさあ。一応合法だよ。でもお」
どろり、陰茎にたっぷりかけられて、後孔へと垂れてきたそれを指で押し込まれる。

「ッは、……っ」

「俺の飼ってる子たちはあ、み〜んなこれが大好きなんだよね〜。熱くてムズムズしてたまんあくなつて、泣いて俺のちんぽを欲しがってくるの。かわいいんだよ〜」

ローションを満遍なく塗り広げるように、二本の指を抜き挿しされる。膨らんでしまった前立腺をわざと掠めていくのに腹が立つ。反応したくないのに、どうしても身体がびくびくと跳ねてしまう。

「つく、あ……、悪趣味すぎる、でしょう……!」

「そーお? ま、どうせおまえも泣いて悦がることになるからねえ。すぐに効いてくるから楽しみにしててね?」

そう囁う局長が次に手にしたのは。

「……や、それは……っ」

がちやり、思わず身体を振った。

「あは、知識はあるんだ? ま、年の功ってヤツかね? ——動くなよ、無様な姿で病院送りになりたくなければな」

「……ッ！」

その手に持った黒くて細い、恐らくシリコン製のそれが、ひたりと鈴口に当てられて身体が竦む。たつぷりとかけられたローションのせいで充分すぎる程潤ったそこを、ゆつくりと黒いブジーが突き進んでいく。

「ッ、あ、ぐ……うっ」

歯を食いしばって圧迫感と微かな痛みにも耐える。けれど、だんだん――

「……あ？ う……ッ、は、うう……？」

無意識に、身体が揺れて拘束具が耳障りな音を立てる。

「あつは、効いてきたー？ 粘膜に直塗りしてるからあ、効きが早いっしょ。特に尿道なんて刺激に慣れてない場所だしね、あつという間にイ……きもちよおおくなれちゃうよ？」
にちゅにちゅと音を立てながら浅く抜き挿しして少しずつ隘路を進んでいくブジーに、圧迫感が消えていって、耐え難い感覚が生まれてきた。

「……ッ、は、あ……ッ、うッ、ああ……♡」

「あは、声があまあくなつてきちゃったねー？ もうすぐ行き止まりだよ。……さて、キミは、耐えられるかな？」

「……？」

こてん、と首を傾げた局長の意図がわからずに、眉を寄せたその時。

「ッあ!? あああ~~~~ッ♡♡」

尿道の奥にある何かがブジーに刺激されて、身体を仰け反らせて喘いだ。

「あはは! い〜い声だね! ちょおつとグリグリして〜、この前立腺にローションをすり付けとくねっ♡」

「ッひ、ああ——ッ♡ やめ、ぐりぐりするなあ……ッ!」

感じたくないのに、おなかの奥からどんどんもどかしい熱が上がってきて、みっともなか嬌声を上げそうになる。喉の奥で必死に噛み殺し、腰を揺らさないように耐えるけれど。
(だめ、だ……ッ、お尻の中が疼いて……っ、かき回したくなる……う!)

「あははっ、可愛い声! いいね〜、いつもそういう可愛い鳴き方してくれればいいんだよ〜。それができるんならこんなお仕置きやめてあげられるんだけどな?」

「ああッ♡ いや、いやだ……ッ!」

飲み込まれないように局長を睨みつけながら、必死で首を振る。

「……ふーん。ほんつと可愛げなくてムカつくよね〜おまえ。んじゃ、もう助けてやんないから頑張つて泣き叫んでろ。本気の謝罪とおねだりができるまで解放しない。めいっばい悶え苦しんでな」

不機嫌そうに顔を歪めて立ち上がった局長が、冷たく高梨を見下ろす。

「はーい！ 次長、副総監、準備完了ですよ！ あとはおまんこにどの玩具突っ込むか、おふたりで選んであげてくださいーい！」

くるりと身体を翻した局長が、これ以上ない程に愉しげな声を上げた。

「なかなかやるなあ、局長。調教し慣れてる感じがするね」

「ありがとうございます、次長！」

「なるほどなあ。いや、勉強になる。仕事ができる男だなあ、キミは」

「うふふ、副総監もありがとうございますっ」

がちやがちやとバッグの中を漁っていた二人が、各々パイプを手にして高梨の前に立った。

ひとつはウネウネと波打って、一面にびっしりと吸盤のような突起がついた細長いもの。もうひとつはすんなりとまっすぐな形状のもの。どちらも、先端に向かって細長くなっている形で、太すぎるものでもない。

けれど、そのふたつのパイプが、同時に後孔に宛がわれて。ぞわっと悪寒が走った。

「――!? 待つ、無理、ふたつは無理……ッ、いや、やめろ、それは絶対無理っ……!! いやだ……ッ!」

覚悟をしていたはずなのに、満足に動かせない身体を必死に振って逃げを打ってしまう。「ふん、恨むならいつまでも反抗をやめない自分を恨むんだな。局長に対しても生意気な口振りをやめる気がないし、ならば身体で思い知らせるしかないだろう?」

「なーに、痛いわけじゃないさ。死ぬほど気持ちいいだけだから、むしろ温情だろう。それに俺たちは優しいからな、ちゃんとして細いものを選んでやってるんだし、感謝して欲しいところだぞ」

男たちは嗤いながら、ぶちゆりと先端を同時に後孔へと埋めた。

「ッひい……ッ!」

「あつはは! あの高梨がなっさけない悲鳴を上げたぞ。この先が楽しみだなあ」

「ッぐ、あ……ッ! やめ、ひい……ン!」

さっきまで次長のを咥え込まれていたとはいえ、そして細身のバイブとはいえ、ふたつ同時に受け入れるのはあまりにキツすぎる。ずぶずぶと埋まっていく圧迫感に苦しみ、そして。

（イヤだ、なんで、気持ちいいなんて思えるの……ッ!）

過敏になった内壁を抉られて、どんどん呼吸が荒くなってしまふ。

「あ、はッ♡ はあ……っ♡ いや、やだあ……っ♡」

「ククク、息が荒くなって声も甘くなってきたなあ、高梨よ。気持ちいいか？」

「ッ、違う、ちがうちがう……ッ！ そんなわけ、ない……っ♡ ッあ、うう……ッ♡」

「嘘が下手だなあ。腰がゆらゆら卑猥に動いて、拘束具がガチャガチャとうるさいのになあ……ああそうか、無意識か。それはそれは、余計に卑猥だなア」

「違う、違うッ！ ……あッ♡♡」

パイプがごりゅつと前立腺を押し上げて、びくんと腰が震える。

「あー、メスしこりに当たっちゃったなあ。場所を教えてください。礼を言うよ。さて……頑張って卑猥に踊れよ、雑魚メス」

ぶちっ。ふたつのスイッチを押す微かな音が耳に届く。ぶいん、とモーター音を響かせて、ふたつのパイプが胎内で蠢き始めた。

「ッあぁあ……ッ♡♡ いやッ、回ってるうう♡♡ いやっ……いやだ……っ♡♡」

どちらかはわからない。ぐりんぐりんとスイングして、過敏になりすぎた胎内を抉る。時折前立腺を掠めるせいで、ぞわぞわと腰が重くなっていく。

「ひゃあ……ッ♡ やッ、うねうね、して……ッ♡ 吸われて、るう……!？」

もしかしたら吸盤がついている方かもしれない。胎内でウネウネと波打ち、きゅぽつ、きゅぽつ、と貼りつくような感触が伝わってしまつて。声を上げたくないの、どうやつても我慢ができずに不自由な身体でじたばたと藻掻いて、喘ぐ。

「あッ♡ ああぁ……ッ♡♡ いやッ、イク……ッ♡♡ やあぁつ、イっちゃ、う……っ♡♡」

「はっはっは！ あの高梨がキャンキャン鳴いているぞ！ ああ、たまらなあ……性格は可愛げがまつたくないが、顔と身体は文句のつけようがないくらいに美しいからな。くねくねと厭らしい動きが最高に卑猥でたまらん」

「本当ですねぇ。こんなに可愛く鳴けるとは。いつもこうなら愛で甲斐があるというのに。顔と身体は最高に好みだからなあ、この愛らしさが備わつたら今までの犬たちは目じゃなくくらいに最高のペットになる……飼いつけるだけの価値はありますよ、次長」

「だな。どうにか騷を成功させたいものだ」

三人の男がうっとり和高梨を見つめているのがわかる。だから痴態を晒したくないのに、どれだけ決られても吸われても疼きを増していく胎内と陰茎が、正常な思考を奪っていく。

（気持ちよくなりたくない……っ、でも気持ちいいっ、気持ちいいのに、全然足りない……っ♡）

すぐそこまで絶頂が迫る。勝手に背中が仰け反って、足先がぎゅううつと丸くなる。

「いやああッ♡ イく、イくイぐッ♡ イッぐううう——…っ♡♡♡」

びっくんッ♡ びくッ♡ びくびくんっ♡

「おッ♡ おお〜!? ツや、ああ♡♡♡ イったのに、ッいい♡♡ 止まんない、ああ♡♡♡」

「あっは♡いけ好かないあの高梨くんがとおっても可愛くなっちゃったあ♡メスイキできてもちーねえ！ でも止めないよっ。止めないからもっともーつとメスアクメキメチャえ♡」

「いや、いやあああ——ッ♡♡♡ もうやああ♡♡♡ 止めてえ♡ イぐ、またイぐうう……ッお
おお——ッ♡♡♡」

がくッ♡ がくがくがく♡

「ああッ♡ 出ないッ♡ イったのにいいッ♡♡♡ 出ない……っ♡♡♡」

絶頂をしているはずなのに、腰にはずつと解放できない熱が蟠ったまま。こんな自分は嫌なのに、だんだん追い詰められていってどうしようもなくなっていく。

「ばや……ッ♡ いやだ……あっ♡♡ こんなつ、こんなのお♡ 壊れ、たくな……いのに♡
……♡♡」

白くなりそうな意識を繋ぎ止めたくて、必死で首を振って抗うけれど。

（いやだ、媚びたくないのにつ、出したい、出したい……ッ！ それしか、考えらんなく、なるう……っ）

喘ぎっぱなしの口からは涎が垂れ、熱が疼き続ける腰はヘコヘコと媚びるように動き始める。涙で滲む視界には、興奮しきった顔で見下ろしてくる次長と副総監、そして。

「うふふ、腰がヘッコヘコして止まなくなってきましたね〜！ 壊れたくないんなら、キミのつよい精神力でめいっばい気を張って耐えて耐えて頑張るしかないんですけどお……本気で謝ってくれるんなら一考の余地がありますよ？ 玩具責めをやめてあげられるかもね〜？？」

愉しげに、そして冷ややかに嗤う局長の言葉に、快楽に痺れた頭でも理性が戻ってきて。
「……や、イヤだ……っ」

途端に怒りに燃えた局長が、しゃがみ込んで何かを取り出した。

それは医療用のテープのようだった。後孔に突き刺さったパイプを覆い、べったりと貼

りつけて抜けないように固定される。仕上げのように二本のパイプをぐりぐりと押しつけられて、首を仰け反らせて喘ぐ。

「おッ♡ お、ほおお~~~~ッ♡♡」

「あは、きつたない喘ぎ声！ さっすが雑魚メス。最高に無様だよ高梨くん」
罵った局長は立ち上がり、アイマスクで高梨の目を覆った。

「ッ、やめ……ッ」

無言で離れていった局長が、再び高梨の脚の間に陣取って、カチャカチャと何かを持ち出した気配がした。視界を奪われて、これ以上何をされるのかとどうしても恐怖心が湧いてきてしまう。

「ッあ……!?!」

ブジーが刺さったままの陰茎に、何か輪っかのようなものを取り付けられた。もしかしたらコックリングかもしれないと、背筋に冷たいものが流れていく。ブジーも弄っているような感触が伝わって、カチッ、カチッと何かを嵌めるような音が聞こえて。

パチッ！

「ひいひい!?!」

衝撃で、がくんツ、と腰が跳ねた。

「なに!? 何したの……ッ!?」

局長は無言のまま、バチツ、バチバチツと陰茎に衝撃が走る。

「ひぎ、いいい——っ♡♡ いやッ、なに、なにこれえッ♡♡ やだやだ、やめて、ええ♡♡」

衝撃が止まらない。ビリビリと強い刺激が陰茎を苛んで、何度も何度も腰が跳ねる。

（これ、電流……!? うそ、無理、こんなの無理……ッ!）

「おっ♡ おほおっ♡ いやッ♡ いやあぁ♡♡ 止めて、止めて、ええ♡♡♡」

ガチャガチャと拘束具を鳴らしながら、必死に身体を振る。

そんな高梨を斟酌することもなく、今度は両方の乳首に何かを取り付けられた。

「っひい!? なに、今度はなににッ!?」

きゅぽっ、と胸を吸引するように嵌められた何かには、ブラシのような細かい突起がついているらしい。その突起が、乳頭に当たる感覚がする。

「いやだっ、やめ……っ、ひやあぁあぁ♡♡♡ 擦れて……っ♡ 乳首があっ、擦られて、ええ♡♡」

回転し始めたブラシのようなものが、乳首の先っぽだけを狙って擦りあげる。

後孔の中のバイブは動き続けて前立腺を苛む。陰茎に刺さったままのブジーは、反対側

から電流で前立腺を責め立ててくる。痛みならともかく、ひたすらに強い快楽を押しつけられる容赦のない責めに、高められた身体が耐えられるはずもなく。

ゾクゾクと広がる快感が一気に弾けて、戒められているはずの身体が大きくバウンドした。

「お♡ ツほおお~~~~♡♡♡♡」

びたん、びたん腰を跳ねさせ、舌を突き出して絶叫する。

「お♡♡ ほお♡♡ おぐ、うづ♡♡ らめ、止め、てえ♡♡ イって、るの、にイ♡♡ つよ、いじ——♡♡♡♡」

びっくん♡♡ びくっ♡♡ びくっ♡♡

止まらない刺激にまたメスイキしてしまつて、頭の中が真っ白に染められていく。

(だめ、もう……キモチイイしか、わかんない……♡)

「ひい♡♡ きもちいい♡♡ きもちいい♡♡ もうムリ♡♡♡♡ きもちくてええ♡♡
もうわかにや♡♡ ツお♡♡ イぐ、~~~~♡♡♡♡」

がく♡♡ がくがくがく♡♡

「出にや、い♡♡♡♡ 出したい♡♡ 出したいよお♡♡♡♡ おねがい♡♡ 射精させてっ

くださ、いいっ♡♡♡ つや、またイク♡♡♡ メスイキしちゃ、あ——……っ♡♡♡」

がくがくがくっ♡♡♡ ぷしっ♡♡♡ ぷしっ♡♡♡

痙攣が止まらない腰を跳ねさせて、揺れる陰茎の隙間から何かが零れたような感覚がした。

「なにに……？　なんか、出ちゃ……っ♡♡♡ きもちいい♡♡♡ きもちいい♡♡♡ やら、こわれ、る♡♡♡ おお——ッっ♡♡♡」

必死に泣き叫んでも、誰の声も聞こえない。高梨の足元にいたはずの気配も消え失せて、情けなく腰をへこつかせて喘ぐ自分の声だけが響き渡る。

絶え間ない快楽に襲われたまま、一体どれだけの時間が経ったのか。

「ごめんなしゃ、いい♡♡♡ 許ひてえ♡♡♡ やら♡♡♡ もうムリにやの、にイイっ♡♡♡ まらアクメ、しゆるっ♡♡♡ あッあ~~~~♡♡♡」

もう理性なんて消え失せて、早くこの快楽拷問から解放して欲しいという気持ちしか残っていなかった。

「きもちいのにい♡ 足りないの、お♡♡ ごめんなしゃ、いつ♡♡ もうゆるひてええ♡♡ おねがいい♡♡ ちょおだい♡♡♡♡」

「……はあ、たまらん。こんなに可愛い姿は初めてだぞ」

「たった一時間放置しただけで、あの高梨がこんなにトロットロに泣き叫ぶとは……ああ、最高に愛らしい……!」

「うふ♡じゃじゃ馬が堕ちる姿って何度見ても最ッ高ですね〜! めっちゃくちやえっちゃでたつまんない! 美人だからなおさら無様さが際立って……やっぱ、勃起が止まんないや♡」

興奮しきった声が降ってきて、煽られてますます疼きが強くなっていく。

(欲しい……っ、玩具じゃ足んない……熱いのが、欲しい……っ♡)

「やあ♡ 足んないっ♡ 足んないのお♡♡ きもちいのにつ♡ 欲しい♡♡♡♡」
へコッ、へコッと腰を揺らし、涎を垂らしながら必死でねだる。

「おねが、おねがいしましゅう♡♡ ナカにつ熱いのがほしいのお♡♡ 足りないのお♡♡♡」

誰かが近づいてくる気配がする。するりと頭を撫でられて、それだけでも快感が走って身体を弓なりに反らせて鳴く。

「ひゃあああん♡♡」

「ッはははは！ 頭を撫でただけで気持ちよくなったのか、おまえは！」

「ひゃい♡♡ きもちくてえ…♡♡ 触ってえ、もつと触ってえ♡♡」

「ははは、とんでもない破壊力の愛らしさだな！ いつもこうなら苦労はせんのだがなあ…それで？ おまえは何が欲しいんだ？ おまんこにはもうふたつも突っ込んであるだろう」

この声は恐らく次長のものだ。その声に彼の怒張を思い出してしまつて、おなががどんな切なく疼いていく。

「おねがいますう…♡♡ おちんぼ、次長のおちんぼをお♡♡ 俺のお尻に挿れて欲しいですう…♡♡♡」

「うーむ、惜しいなあ。いいか、おまえは俺らのペットだ。そして俺らはおまえの主人だ…なんと呼べばいいか、頭のいいおまえならわかるだろう？」

「は、はい…♡♡♡ ご主人さまああ♡♡ おねがいます…♡♡♡ 俺のお尻につご主人さまのおちんぽをください♡♡♡」

「まだ間違っているぞ。おまえはメスだ。メスについてるのはおまんこだろうが」

「ごめ、なさいっ♡ おまんこですっ♡ おれのおまんこにいい♡ ご主人のおちんぽを
くださいいッ♡ お願いつ♡ おまんこ切ないのおお……っ♡♡」

ヘコ、ヘコ、みっともなく腰をくねらせて媚びる。

「ではここで宣言してもらおうか、高梨。——おまえは俺たちのペットの雑魚メスだ。おまえのまんこは俺たちのためのザーメンタンクなんだから、求められたら素直にケツまんこを差し出すことを誓え。……誓わなければ、このままずっと射精できないまま、拘束して監禁し続けるぞ」

「はい……っ♡ 誓いますう……っ♡ おれはっ、ご主人さまたちの雑魚メスです……っ♡、おれのおまんこ、を、たくさん使って、ください……っ」

快楽に蕩けた頭でも、無様な宣言をさせられていることだけは理解できた。心と身体が乖離して、逆らえない自分が情けなくて、ポロポロと涙が零れていく。それでも媚びるしかない現実が、ほんの少しだけ残った正常な意識を苛む。

「……まだ堕ちきっていないか。なかなかの精神力だな。これは可愛がり甲斐があるなあ……それでも快楽に抗えないのは、おまえがどうしようもない淫乱なんだろうよ。キモチイイ

ことは大好きだろう？」

「う、うう……♡ はいい……つ、大好き、です……う」

媚びるように笑いながら、それでも涙が止まらない。

「ふーむ、なかなかにしぶといが……今日のところは及第点じゃないか？ どう思う、副総監、局長」

「ま、そうですね……一度じゃ堕ちきらないだろうとは思ってましたし。そろそろご褒美をあげないと逆に反発しちゃうかもですからね。今日のところはここらが落としどころかなって気はしますよ。充分可愛く鳴けるようになってますしね♡」

「俺はだいたい満足ですよ。こういう調教はそもそも長期戦ですからなあ。局長の言うとおり、今日のところは褒美をあげてやりたいですな。その方が、可愛く鳴く姿を堪能できそうです」

「確かに、副総監の言うとおりだ。この感じなら、まんこに突っ込んで可愛く鳴いて悦んでくれそうだしな……よし」

するり。麻縄が解かれて、圧迫感から解放された。胸に取り付けられていたものも、絶え間なく流され続けていた電流も止まり、留め具が外されていく。

「あ♡ は、ああ……っ♡ イくう……っ♡♡」

ずるんつとパイプが引き抜かれていく。敏感になりすぎた胎内が抉られて、また絶頂してしまった。

「ははは、とんでもない愛らしさだ。たまらないな」

はあ、と興奮を堪えるような吐息が肌を掠めて、ぞわつと快感が走る。

「ん、うう……♡」

ブジーだけは残されたまま、すべての拘束が外れて身体が軽くなった。そつとアイマスを外されて、視界が一気に明るくなって目を細める。

「ククク、顔もトロットロだなあ。かつてないほどに可愛らしいぞ、高梨」

「さて、ペットに相応しい作法を教えてやろう。しっかり覚えるんだぞ」

「ッ、はい、ご主人さま……♡」

涙に濡れた目で、ぼんやりと次長を見上げる。

「ソファから降りて四つん這いになれ。尻をこっちにに向けてな」

「はい……♡」

素直に、言われたとおり床の上で四つん這いになる。

「まんこを両手で開け。ナカを見せつけるように」

「ッ、はい……っ」

「じゃあ、俺の言葉を復唱しろ。次からはきちんと自分でねだれるように、一言一句しっかり覚えろ」

「はい……っ、承知、しました、ご主人さまぁ……♡」

床にべったり頬をくっつけ、お尻だけを高く上げて後孔を晒して、言われたとおりの卑猥な言葉で、媚びる。

「俺はっ、ご主人様たちの雑魚メス、です……っ♡♡ 俺の、淫乱なおまんこにい♡ ご主人様のおちんぽを……っ、突っ込んで、めいっばいかき回してっ♡ メスアクメさせてください……ッ♡ たっぷり、ザーメンを注いで、ッ、孕ませ、てえ……っ♡」

ぼろぼろと涙が止まらない。情けなくて、屈辱で、それなのにどうしようもなく興奮してしまっ、腰が勝手にヘコヘコと揺れる。

はあ、と興奮しきった溜息を吐いた次長が近づいてきて、高梨の臀部を鷲掴みにした。

「ッあ♡」

「可愛くなったおまえにご褒美だ。無様に鳴き叫べ、雑魚メス」

「はい……ッ♡ おっあぁあ~~~~っ♡♡」

ぱあんッ！ と腰を叩きつける音が響いた。ひと息に貫かれて、背中を思いつきり反らせながら鳴き声を上げる。

「ッは、まんこがヒクついてたまらん……！ 入れただけでメスイキしたのか、優秀だなア雑魚メス！」

「ああ……ッ ア……ッ♡♡♡ メスアクメ♡♡♡ しまし、たあ♡♡♡ きもちいい♡♡♡ おちんぽきもちいい♡♡♡」

「ああくそ、なんて可愛さだ……！」

どすッ！ どちゅっ♡ どちゅどちゅどちゅッ♡

「おうッ♡♡♡ おっ♡♡♡ おッほおッおんっ♡♡♡」

がっちりと高梨の腰を掴んだ次長の腰が、荒々しく動き始めた。氣遣いの一切ない、自分勝手なピストンに翻弄されて、みっともない喘ぎが口からぼろぼろ零れていく。

「はははッ！ 雑魚メスらしい汚い喘ぎ声だなあ高梨イ！」

「おほおッ♡♡♡ ひやいい♡♡♡ おッ♡♡♡ きもちくてええ♡♡♡ おうっ♡♡♡ 声とまんや、いい♡♡♡」

「はッ、やつぱりおまえは根が淫乱だったんだなア！ これだけッ、乱暴にピストンしてもッ、悦ぶ淫乱がッ！」

どすッ♡ どすッ♡ ばすんっ♡ ばすんッ♡
重く強く突き上げながら、ばちっ、ばちんっと思いきり臀部を叩かれる。

「あひゃあぁッ♡ らめっ♡ おほッ♡ 叩くのらめええ♡ ひいぃん♡♡」

「なあにが駄目なんだ、ぎゅうぎゅう締めてきておいてッ！ 痛いのもキモチイイんだろうが、この雑魚メス！」

「ひゃあぁん♡♡ ごめ、なさッ♡ きもちいですう♡♡ あぐうう♡♡ らめ、叩く、のッ♡ イっちゃ、ううう♡♡」

「ははは！ 叩かれていくのか!? とんでもない変態だなァ！ おうイけ、いくらでもイケ！ おらッ、イケ雑魚メス！」

「あひッ♡ イくう♡ 叩かれてえっ♡ イっぐ、ううう——ッ♡♡♡♡」
びっくんッ♡ びくっ、びくびくッ♡

「ひい……っ♡ 出ない♡ 出にやいっ♡♡ おねが、ご主人、さまあぁっ♡ 出させてっ♡ 射精させてくださいっ♡♡ おねがい、しますう♡♡」

力の入らない上半身で、どうにか後ろを振り返って笑みを浮かべて媚びる。ゆらゆらと腰を卑猥に揺らめかせたら、腰を振り続ける次長が下卑た顔で口角を上げた。

「はん、ペットの自覚が出てきたらしいなあ高梨よ。ちゃんとやればできるじゃないか、満

点のおねだりだぞ。よし、ご褒美だ……局長」

「はい、まっかせてくださーい！ 次長、引っ張り起こしてあげてー」

「ああ」

後ろから二の腕を掴まれて、ぐいっと引き起こされる。膝立ちになって露わになった陰茎に、局長の手がかかった。

「はあ……ん♡」

「あは、あまあい声たつまんないですねえ！ うふふ、金玉がパンッパンに詰まって苦しそ♡さあて、どんな卑猥な鳴き声を聴かせてくれるのかな？」

ずるる、とブジーが引き抜かれていく。ずっと堰き止められていた精液が、一気に尿道を駆け上っていくのがわかる。

「あ、あ、お……♡ 出る、でるう……！」

カクッ、カクッ、無意識に腰が揺れる。そしてとうとう、ぢゅぼん、と全部が引き抜かれて。

「あッ!? ツがあああ~~~~♡♡♡ 出てりゅ、ううう♡♡♡ ンああああ♡♡♡ 止まん、にやあああ♡♡♡ ぎもぢい♡♡♡ ぎもぢい♡♡♡ いっ♡♡♡」

どろッ♡ どぶっ♡ どぶぶッ♡

溜まりに溜まった精液が、後から後から溢れていく。止まることのない射精の快感に、パチパチと脳内が灼かれていって、頭が真っ白になって。

「あ♡ が……ッ♡♡」

舌を突き出したまま、首を仰け反らせて脱力した。

ごっちゅんっ！

「おッ♡ ほおお——ッ!？」

「何勝手に気絶してるんだ、この雑魚メスがッ！ 射精させてもらっておいで礼も無しに寝るとは、騾がッ！ 足りんじゃないなァ!？」

「ひぎゃああ〜ッ♡♡ ごっごめんな、さ、あ♡♡♡♡ ありがとう、ごさゐ、ますッ♡♡ 射精っさせてくれてえっ♡ ありがとう、ごさゐ、あ♡♡♡♡」

腕を捕まえていた手を離されて、またべちゃりと床にへたり込む。苛ついたらしい次長が、高く上げた高梨のお尻を潰す勢いで強く突き上げてくる。

必死に泣き喘ぐ高梨の目の前に、副総監が現れた。前髪を鷲掴みにされて、ぐいっと引つ

張られて顔を上げさせられて。

唇に、大きな怒張が突きつけられた。

「仕置きた。口を開けろ」

「はい……っ♡」

素直に口を大きく開ける。ずぶり、と大きすぎる剛直が一気に喉奥まで突き刺さった。

「おッごおッオ——っ♡♡」

「っは、いつもより圧倒的に熱いな……！　おら、へばってないでしっかり舌を使って奉仕せんか」

「ンっご、おッ♡　ぢゅ、ぢゆるう♡　ぢゅぱ…ッ♡　んっぐ、う♡　ッおご、お♡」

荒々しく揺さぶられ続けてチカチカと瞬く視界の中、副総監のふともものに縋りついて、必死に剛直に吸いつく。後ろ髪を鷲掴みにされて、持ち手のように引つ張りながら頭を前後に揺さぶられる。同時に腰も振るものだから、容赦なく喉奥を突かれて、息苦しさに目が裏返っていく。

「ふはは、白目剥きやがって、そんなに美味しいのか、俺のちんぽは！」

「んぶうぐう♡　ぢゅううッ♡　ンっお、おッ♡♡」

「イラマしだした途端にまんこがもっと締まり始めたなあ！　そんなにイラマが好きだっ

たのか、変態すぎるな、ッ！」

「んッおッお——ッ♡♡」

ごちゅんッ！ と後孔を突き上げられ、その反動でより深く喉奥に剛直が突き刺さって、また快感が弾けた。

「んぐ、うぐうぐ……ッ♡♡♡♡」

がくがくがくッ♡ びゆる♡ びゆるるっ♡

戒めるもののなくなった高梨の陰茎から、また精液がぼたぼたと溢れる。

「はははッ！ まーたイキおったな！ はあ……ッ、喉が締まる……！ くそ、しゃぶるのが上手くなりすぎだろうが、この雑魚メスが！」

「あー、ケツマンもずいぶんしゃぶるのが上手くなって、ッは、俺もそろそろ、いくぞ……ッ！」
「んぐうぐう——!? おほ、おッお♡♡♡」

ずっちゅ♡ ずっちゅ♡ ずちゅずちゅずちゅッ♡

どすッ♡ どちゅッ♡ どちゅどちゅどちゅッ♡

口腔内の剛直も、胎内を犯す怒張も、どちらも抽挿の激しさがどんどん増していく。自分たちの絶頂を追いかけられるだけの荒々しい動きに、いったばかりの高梨もまた、無理やり絶頂へと引き上げられていく。

（息がつ、できない……！　くるし、のにつ、キモチイイ……っ♡　だめ、またいく、いく
いく♡　おっきいのが、来るうう……！）

前から後ろからも激しく揺さぶられて、声も出ないままにぞわぞわと快感が溜まって
いって、神経が焼き切れそうな程の悦楽がすぐそこまで迫る――

「つぐ、いく、出る……ッ！　出す、たっぷりザーメン出してやるからッ！　全部飲めよ高
梨イ！」

「俺もいくぞッ！　雄子宮をザーメンでたっぷたぷにしてやるからなあ！　しっかり孕め
よ！　孕め、孕め孕めッ！」

ごちゅんッ♡

前後から重く突き上げた2つの剛直が胎内で弾け、白濁が勢いよく迸った。

びゅるッびゅるるるっ♡　どぶっ♡　どぶどぶぶッ♡

「ゾお、お……っっ♡♡」

ほとんど同時に、高梨もいちばん大きな絶頂の波に浚われて、身体を激しく痙攣させた。
（熱い、キモチイイ♡だめ、もう、壊れ、る……）

上からも下からも注ぎ込まれる熱さに、びくびくと力なく身体を痙攣させながら、必死
に飲み干していく。キモチイイ以外がもうわからなくなつて、熱いもので満たされる悦び

に、歪な笑顔を浮かべて目を閉じる。

「ははは、最高に気持ちがいいな……はははッ、精液飲みながら笑ってやがる。一気に仕上がったなあ、雑魚メス」

「ケツまんこもちゅうちゅう上手に吸いついて、ずいぶん奉仕が上手くなった。かつてないほどに素直になったなあ、高梨よ。やればできる子だ」

ずるり、身体を満たしていた剛直がどちらも抜けていく。支えるものがなくなつて、立ち上がった次長にお尻を蹴られてべちゃりと床にうつ伏せた。ゲホゲホと噎せながら、弱々しく呼吸をして次第に意識が薄れていく。

つづく